## こんなこと言ってました

「贔屓目はないですよ、あくまで公平にです、こーへーですよいいですか。極めて職業的に冷静に平坦に客観的な評価という前提ですけど戸川さんはエロい！エロいんですよ！感じますねエロさ！足長い！なにあの綺麗な足！若さ！若さみちみち！スカートの動きと相まって歩いているだけで隠しきれてない！教師としてはぁ、もう、注意しないといけないって、ねぇ？そんな足がぁ、夜に町をうろんしてたら、歩く犯罪予備軍です。あああもう心配だ、心配だよぉ……やだぁ、戸川さん他の人に触られるのやだぁ……私も、触りませんよ？教師はね、んなことしちゃだめっこです。でもやだ……やなんだぁ。戸川さんが傷ついちゃったら、本当に、嫌だぁ……かわいいもんな、かわいい。戸川さんのふわっふわの髪とかもう、どれだけ手入れしたらあんなかわいいのか……エロくてかわいいとか、もう、抱っこしたい。抱っこしてぇ、にこにこね、守ってあげたい……あのクソ親、ほんと、死ね。死ねよあのクソが……戸川さんがね、ずっと寂しいの分かっちゃって……なんだよあの母親はよぉ……涙出そうになる。悔しいし腹立つし、ああもう、ムカつく……なんもできない自分が一番ムカつくなぁ……十七歳って思った以上に子供なんですよ。支えが欲しい年ごろなんですよ分かりますか!?それをいつも笑顔で過ごす戸川さんはなに!?凄くない!?高校はねぇ、なんでああいう心持ちの子を評価しないのか。教育の限界ですよ実際。ああでも他の教師が戸川さん褒めてんのもなんか……やだなぁ……嫌だぁ、戸川さんの笑顔が他に行くなんて。戸川さんはいつもにこにこしてるようで本当は……いや本当のね、笑顔を向けてくれるんですよぉ私に……それがもうほんと、愛しい。胸から喉まで満ちるくらい、息苦しいほど、かわいい……かわいい、かわいい……自惚れたいんですよ私は、自分が戸川さんにとって特別だって。いえもう自惚れてます、じゃなきゃね、こんな……額が痛いもん、あの子のこと考えると。脳のね、負担が凄い。脳が痛い。頭をね、戸川さんが埋めちゃってる。それで生きていけるんだからもう、許されてる。戸川さんに許されてるんです。だから、特別じゃないかなぁって……ふぇへ、ふぇへへっへ。戸川さんから受ける刺激がねぇ、人生を生き急がせるんですよね。予言しちゃうとあの子の側にいると私、早死にします。あらゆるものの消耗がね、ヤバい。人生すり減らしてるの実感してるのに離れられる気がしない。なんであんな、胸いっぱいになっちゃうかなぁ……背の高い、スラッとあの背中が伸びてるの、エロい……健康的にね、エロい。すーって背筋に指這わせたい。触りませんよ！教師ですから。這わせたい……夏服の戸川さんは反則……あれで無邪気に近寄ってくるから私、大変なんですよ……表に出さないの……無警戒すぎて怒りそう。怒ってます、割と。私の気持ちをね、もうちょっと、熟慮して……受け止める側も大変なの、戸川さん分かってるかなぁ!?悪い女ですねぇ、ほんと……ふっへへへへへ。手もね、困っちゃう。握ってね、くるんですけど、握るのね、好きなんですけど……捕まっちゃわないかなぁ。あれねー、もっと問題になるよね、絶対ねー。なんで許されてんだろう……でもね、まずっちーなんだけど、離すの嫌っちーでね……戸川さん、にっこにこだから……あの子のね、笑ってるのは、幸せ……幸せなんですよね結局。笑顔でいてほし……心からの笑顔が、私に向いてほしい……私だけがいい……あれ、あれ。こんなことを言っちゃうと、恋をするとしたらぁ、元気なあたたかな笑顔がぁってやつ……私だけできてる今がほんと、幸せで……他の人と手を繋いでたら、ああ、泣きそう。だってですよ、他の人がですよ、戸川さんと手をにぎにぎしてぇ……足、スカート……うーわ。うーわじゃん。やだ、やだ……ああ、戸川さん私のだと思ってる……思ってるんだ私ぃ……だって仕方ないじゃん。あんな、勘違いするじゃん！勘違いかなぁ!?あー……ああぁぁ……戸川さん、ほんとエロいなぁ。なんであんな背がスラッと……爽やかにエロいんだろ……エロいっていい意味ですよ。ふつーの。ふつーにエロい？ふ、ひゃっへへへ。エロはまずいっしょー、教師がぁ。もう教師なぁ、やめるかなぁ。やめるか？戸川さんエロいんだもん……エロ教師になっちゃう。えろてぃーちゃー。まずいよねぇ……まずいってねぇ分かってるんです、りせーてきです。理性はもう、胸にたんまり。でもね、人間は脳が支配してるんです。脳はね、戸川さんにお手上げしてるから……理性なんて、下で騒いでるだけの野次馬ですよね……上は大火事下は洪水なーんだってあれ。エロ。エロい生徒！戸川さんねぇ……あんなの絶対、周りの子がほっとかないよぉ……誰か付き合ってたら……いやだいやだ、やぁ……いけません！だって戸川さんはね、汚れたら……傷ついたら……いっぱい悲しい……。やだ、泣く。想像だけで涙ぶわっとしちゃった。私はぁ、戸川さんが自分から巣立ってほしくない、身勝手なぁ……エロ教師。ひどいなぁ、にょほ、ほっほほ……絶対にね、胸元は見ないようにしてるんです……気づかれたらぁ、死ぬ。死んじゃうよ私……だからね、がんばってんです。正面にいるとですねぇ、身長差のせいですねぇ、ちょっと目を下にすると見えちゃうんです。だからうえぇーを向いてぇ生きている！るら？目が、ぐるぐる……戸川さん、戸川さん……とが、戸川さんが……とがーさん…………」

「これ録音してる？」

「するわけないでしょ」

「凛に聞かせてやりたかったんだけど」

「それやったら多分窓から飛び降りるよ。そういう先生だと思う」

「だな。……ま、どのみち破滅しそうな気がするけどね」

「凛といる限り、と彼女は笑った。

同感、と完全に酔い潰れて言葉を失った先生の、薬指の結婚指輪を見つめる。

「あんたの友達だけあっていい趣味してるねぇ、この先生」

今の流れの中で旦那さんについて一切言及がないのも含めて。

「うむっ」

嫌みが通じない女の笑顔が太陽みたいに輝くので、そっと、目を逸らす。

こいつのバカみたいな性癖だけは本当に……バカだ。